ファーストデート

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストデート

【Nコード】

N8789H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

付き合いだしてはじめてのデートをすることになった瞬と梓。周りはあれこれ言うが自分達は至ってマイペースで。果たしてこのデートはどうなるか。ラブコメです。

第一章

ファーストデート

「こんなのいらねえって」

「馬鹿か御前」

「いらねえわけねえだろうがよ」

皆速攻で彼に突っ込みを入れた。

彼の名は増谷瞬、髪をボブのように伸ばして中央で分け茶色に染めている。顎が細く眉はあがっている。小さい目が妙に能天気な光を見せている。背は中々高い。

「デートはじめてなんだろうが」

「それでいらないうのかよ」

「出たとこ勝負だよ、こんなの」

彼はあくまでこう言っただけで本屋で皆が出すガイドブックやらデート攻略法といった本を受け取るうとはしない。夏の学生服姿であれこれと騒いでいる。

「俺のいつもの通りにな」

「で、自爆かよ」

「おい、自爆って何なんだよ」

「御前な、何も勉強しないでできるわけないだろうが」

「どつという頭の構造してそんなこと言っただよ」

周りはすぐ今にも牙を出すような声で彼に言い返したのだった。

「そんなことをよ」

「たかがデートじゃねえかよ」

しかし瞬は平気な顔でこう皆に返した。

「たかがよ。そうじゃねえのかよ」

「やっぱり御前馬鹿だな」

「全くだ」

周りは彼の今の言葉に呆れた声で返した。

「デートがどれだけ重要なことがわかってねえのかよ」

「しかもファーストデートだぞ、ファーストデート」

「戦争に行くんだぞ」

デートを戦争とまで言うのだった。これまた随分と物騒な表現であるが彼等にしてみては完全に本気であった。その本気で彼に忠告していた。

「それで何でそんなに能天気なんだよ」

「というかどんな頭の構造してるんだよ」

「何か言ってる意味がわからねえけれどよ」

瞬にとつては意味がわからないことだった。皆がここまで言う理由がだ。

「だからよ。どうとでもなるものじゃねえか」

「出陣するのに鎧兜もなしでかよ」

「しかも初陣だよ」

「いいか、塩谷」

またしても真剣そのものの声での言葉であった。

「こうして勉強して最初にビシッと決めないとな」

「それで終わりなんだよ」

「終わりかよ」

瞬は彼等の話を聞いてもまだわかっていない口調であった。

「それで」

「それだけファーストデートってのは大事なんだよ」

「わかつたらさっさとこうした本買って勉強しろ」

「いいな」

こうして彼等は無理強いに近い形で彼に本を押し付けてそのうえで買わせた。そしてこの騒動は彼等だけではないのであった。

「だからね。服は可愛くよ」

「アピールが大事だからね」

マクドナルドの席の一つでブレザーの制服の女の子達があれこれと話をしていた。そうしてそのうえで真ん中にある女の子に話して

いた。

その女の子は茶色の髪を長く伸ばしている。カマボコの形をした目は少し吊り目になっている。顔は細長く身体も細い感じだ。背はあまり高くない。胸もあまりないがそれでも制服からもわかるそのスタイルは全体的に見てよいと言えミニにしているスカートから見える脚も奇麗なものであった。

「いつもみたいなジーンズとか愛想のないのじゃなくてね」

「もう女の子らしくね」

「じゃああれ？」

その女の子は周りの声を聞いて少しだけ考えるような口調で述べた。

「デニムのミニとかは駄目なの？上はタンクトップで」

「別に悪くないわね」

「あんたああした格好似合ってるし」

それは皆からよしとされたのであった。

「いいと思うわよ」

「それはね」

「そう。じゃあ服はそれでいいのね」

「アクセサリーはそうした格好だと」

今度はそうしたことについて考えられるのだった。

「ブレスレットにペンダントかしら」

「ペンダントは注意してね」

とりわけペンダントについて話されるのだった。

「首筋に視線をやるから」

「そこんところいいわね」

「ペンダントっていったら」

女の子はそれを聞いて目をしばたかせてから述べた。

「あれよね。いつもしているみたいないな銀色の小さいの？」

右手で自分の首を触りながらの言葉だった。今そこにあるのは制服のブラウスとネクタイである。実に女子高生らしい服装である。

第二章

「あれでいいのね」

「そうよ。ついでに」

「そうねえ」

ここで皆あらためて女の子の顔や身体を見る。そうしてそのうえでまた語ってきた。

「あとは。あれよ」

「梓、あんた色白いじゃない」

「ええ」

梓と呼ばれた女の子は一人の言葉に頷いた。

「だから左手にペイントもいいわね」

「そうそう、夏だし」

「左手になのね」

「別に右でもいいわよ、それはね」

「別にね」

これについてはどちらでもいいと話されたのだった。

「とにかく。瞬君の目を惹き付けるのよ」

「いいわね」

「瞬君の目をなのね」

梓はその言葉を聞いてまたしても目をしばたかせた。その中にある光はきよとんとしたものになっていた。その目のまま語るのだった。

「惹き付けるの」

「デートは勝負よ」

「彼氏の目からその心をゲットするね」

女の子達はここで拳を作って言ってきたのだった。

「女羽田梓の一世一代の大勝負なのよ」

「だったら。もう細かいところまで気を使ってゲットしないと」

駄目だというのである。

「いざ、真剣勝負へ」

「わかつたらもうとことんまでやるのよ」

彼女達は話していく。最早それはまさに勝負へ向かうその声であった。さながら突撃をしに行くように勢いよく話をしているのだ。た。

「とことんまでね」

「わかつたわね」

「とりあえずわかつたわ」

梓はその皆の言葉に一応は応えた。

「じゃあそうしてみるわね」

「ええ、絶対によ」

「細かいところまで気を使ってそうして彼の心もゲットする」

「後はもうその勢いで最後までよ」

まさに一直線であった。

「わかつたら全部ノートに書いておいて」

「って何よ、書いてないじゃない」

「書かないと覚えられないわよ」

見れば梓の前には大学ノートが開かれている。丁寧にボールペンやサインペンまで側に置かれている。しかし書かれているものは何もなかった。

「折角重要なポイントなのに」

「さあ、書いて書いて」

「ええ、それじゃあ」

梓は皆に伝えてそのうえで書きはじめる。しかしここでこんなことも言うのだった。

「デートってこんなに大変なの」

「そうよ、大変なのよ」

「勝負なんだから」

奇しくも男の子達と同じ感じになっていた。

「もうね。それこそ神風特攻隊になった気持ちだよ」

「体当たりで向かうのよ」

女の子とは思えないような過激なものさえ出て来ていた。

「その為にはまだまだあるわよ」

「勉強よ、勉強」

「お勉強は学校のだけで充分だけれど」

しかし梓はあまり乗り気ではなかった。ボールペンを手に取ってはみているがそれでも困った顔をしていた。

「デートにも必要なの？これって」

「必要不可欠」

「絶対条件」

「これをせずして人生はないわよ」

これが周りの返答だった。

「わかつたら。いいわね」

「勉強するのよ」

「わかつたわよ。あ~~~~あ」

書きながらもそれでもぼやかずにいられない梓であった。

「デートってこんなに大変なんだあ」

今更ながらわかつたというような言葉であった。とにかく双方今は勉強に余念がなかった。

そうしてそれからそのデートになる。デートの待ち合わせ場所は既に瞬の友人達が指定した場所であった。彼等が告げたのは駅の喫茶店であった。

第三章

「いいか、あそこだ」

「あそこにしろ」

友人達はこう彼に言うのであった。

「あそこが一番いいんだよ」

「待ち合わせの場所にな」

「何でなんだ？」

しかし当の瞬は全くわかっていなかったのだった。

「何であの喫茶店なんだよ」

「馬鹿、店の内装がいいからだよ」

「だからなんだよ」

彼等が言う理由はそれであった。

「洒落てるだろ？ああいうのがいいんだよ」

「女の子に人気がある店なんだよ」

「だからかよ」

「そうだよ。しかも来たらな」

「まずは紅茶の一杯でも御馳走してやれ」

そうして紅茶についても言うのであった。何かを御馳走することもまたデートにおいて重要であるということも彼等はわかっているのだ。

「わかったな、レディーファーストでな」

「それで行けよ」

「男女同権じゃないのかよ」

瞬の言葉はここでも要領を得ないものであった。

「世の中つてよ。そうじゃなかったのかよ」

「わかってねえな、こいつ」

「全くだ」

彼等はわかっていたが瞬はわかっていない。そういうことだった。

しかしそれでも良かった。彼等は何とか瞬をその喫茶店に行かせた。そうしたうえで今度は携帯のメールで彼に連絡するのであった。

「いいな、席はそこだ」

「そこで待ってる」

「席まで言うのかよ」

瞬は言われた席に座っていた。そのイギリス風のダークブラウンの色彩の落ち着いた店の中は人形もあればぬいぐるみも置かれ時計もまた古風でアンティークな内装である。実際に店の中にはかなりの数の女の子もいて店の内装そのものも楽しんでいた。

その中の窓側の席に座っていたのであった。彼はそこで自分の携帯を見ていた。メールがそれこそ分単位でひっきりなしに来る。

「来たか？」

「まだか？」

「来たぞ」

瞬は一言で彼等にメールしたのだった。

「今な窓側から見える」

「そうか、じゃあ挨拶しろ」

「店の中に入ったらな」

「ああ、わかったさ」

その梓が店に入ってきたので右手をあげて挨拶をする。梓は黄色いタンクトップに青のデニムのミニスカート、それに白いサンダルという格好だった。右手には虹色のブレスレットがあり首には銀のネックレスがある。女の子達に言われた格好そのままであった。

「可愛くね」

「そしてさりげなく色っぽく」

女の子達の要求はかなり厳しいものであった。

「男の子にそれを見せるのよ」

「そしてハートを鷲掴みよ」

「鷲掴みなの」

「そういうこと、いいわね」

「わかったら行きなさい」

こう言って彼女を送り出したのである。彼女達もまた携帯で梓と連絡を取っている。彼女は店の中に入ると一旦その携帯をバッグにしまった。そのうえで彼の挨拶を受けた。

そして席に座るがここで瞬は。丁度席に来たウェイトレスに対して注文するのだった。

「あつ、ええと」

「紅茶だ、そこで」

「行け、注文しろ」

駅前の本屋のところから見ている男連中が喫茶店の窓の方を見ながら必死に話をしていた。

「そこでだ、紅茶だ」

「ケーキもつける」

そんな話をしながら携帯のメールを送る。なお今彼が携帯を見ているかどうかまでは考えてはいないのであった。しかし必死なのは間違いなかった。

「いいな、それで彼女のハートをゲットしろ」

「男は心配りだ」

そうして女連中も同じだった。彼女達は駅前の噴水のところに隠れながらそのうえで男連中と同じ様にメールを打ちまくっているのだった。

「もつと仕草を可愛くよ」

「キャピって感じよ」

「脚も腕もさりげなく見せて」

やはり彼女達も梓がメールを見ているのかどうかは考えていなかった。

「それでハートを鷲掴みよ」

「絶対に離さないのよ」

噴水に隠れて口にも出しているので本屋でも噴水のところでも行き交う人達に思いきり不審な目で見られていた。本人達は気付いて

いないが。

第四章

「あんた達店の前じゃ静かにしてくれないかい？」

「迷惑なんだよ」

男連中は店の親父さんとおかみさんに睨まれていた。

「お母さん、あのお姉ちゃん達」

「しっ、見ちゃいけません」

女連中は親子連れに指差されていた。しかしどちらもそんなことは見ていない。

「よし、やったな紅茶と苺ケーキ」

「わかってんじゃねえかよ」

「そうそう、そのポーズよさりげなく身体を屈めて」

「胸はなくても胸元を見せるセクシーさよ」

相変わらずそれぞれの場所で騒いでいる。完全に下手なセコンドであった。

「そうだよ、そうやって楽しくお喋りするんだよ」

「ムードを作ればいいんだよ」

「そうそう。にっこりと笑ってね」

「いい感じにやってるじゃない」

彼等は二人を見ながらまだ騒いでいる。しかし二人はそんなことには全く気付かず何時しか携帯のことも忘れ。楽しくデートの時間を過ごしていた。

「それじゃあさ」

「そうよね」

紅茶とケーキを食べ終えてそのうえで喫茶店を後にする。それから向かったのは野球場であった。これもそれぞれの友人達の勧めであった。

「いいか、野球は阪神だ」

「御前が阪神ファンでよかったぜ」

男連中は瞬に対して言っていたのだ。

「都合のいいことに梓ちゃんも阪神ファンだろ？」

「だったらそこにしろ」

こう言って彼に野球場でデートするように説得というか強制したのである。

「一緒に応援してムードを完成させろ、いいな」

「それで行け」

こうして彼にその野球場に行かせた。そして女連中の方もまた梓に対して言っていた。これもまたかなり厄介な話になっていたのである。

「いい？いつも相手の横でね」

「寄り添って上目遣いで見て」

仕草に関するレクチャーが続く。

「脚よね、とにかく見せるのは」

「身体も密着させてね」

「そういうのもさりげなくなの？」

また皆に対して問う梓だった。

「やっぱり。さりげなくなの？」

「当然。あからさまは駄目よ」

「全ては計算で動くのよ」

女連中もここぞとばかりに話すのであった。

「わかったらそれで行きなさい、いいわね」

「いざ戦場へ」

こんな話をしていたのである。二人はそのまま球場に向かって行く。球場では阪神側に座る。阪神は一塁側であった。そして男連中も女連中も球場に入って行く。相手はロッテであった。時期は丁度交流戦の時であったのだ。それでも結構暑く誰もが薄着であった。

「さてと、それじゃあな」

「あの二人どうなるか」

男連中は三塁側のベンチのすぐ上に位置した。

「上手にやりなさいよ、梓」

「ここがメインだからね」

女連中はその隣である。なおお互いには全く気付いてはいない。当然ながら周りにも気付いていない。白いユニフォームのチームは縦縞ではないとはいえ阪神だけではなく熱狂的なファンがバツクにいるのも阪神だけではないということもこの時は全く考えていない彼等であった。

「ここで可愛くみせたらあんたヒロインよ」

「頑張りなさいよ」

そんなことを言うばかりだった。やはり周りは見えていない。阪神主催の試合だというのに巨大な文字が描かれた幕を見せている彼等を。

「よし、そうだよそう」

「わかってんじやねえかよ」

男連中は望遠鏡まで出して瞬を見ながら言っていた。二人は一塁側スタンドの上の方にいる。そこから試合を見ているのであった。

「そうだよ。さりげなくプレゼントな」

「コーラとポップコーンな」

彼等もまたポップコーンを買って貪っていた。しかも学生の分際でビールまで買ってごくごくとやっている。なおそれは女連中もであった。

「いけいけ、やれやれ」

「梓ファイトよ」

女連中もビールを飲みながら言う。肴はやはりポップコーンだ。

「そうやって脚を相手に寄せるのよ」

「わかってるじゃない」

「？何だこの連中」

「マリーンズ応援してないのか？」

ここで周りの白いユニフォームにエムの字の帽子の者達が怪訝な声をあげた。

第五章

「ひょっとして」

「じゃあ何でここにいるんだ？」

「よし、そこで楽しく声をかけるんだ」

「それに応える」

彼等はやはり周りを見ずに言い続ける。

「ムードを作ってリードすればいいんだよ」

「可愛く笑ってね」

大声にまでなっている彼等の周りでは。

「ムードはわかるが」

「可愛く笑う？」

白いユニフォームの彼等が首を傾げていた。

「何言ってるんだ？一体」

「今マリーンズの攻撃中だぞ」

こう言って首を捻った。

「ここは元気よくだろ？」

「何でそんなこと言うんだ？」

やはりそれを不思議に思っていた。周りはそんなふうだった。し

かし彼等はそれにずっと気付かずに騒ぎ続けているのであった。

「よし、やれ！」

「受けるのよ！」

瞬が不意に梓の手に自分の手を触れさせた時だった。

「そこで一気に背中を抱くんだ！」

「わかっているじゃない！」

「やっぱりおかしいな」

「背中？」

マリーンズサポーター達はここでまた首を捻った。

「何言ってるんだ、この連中」

「おい」

あまりにも妙に思ったので彼等に声をかけた。

「あんた達マリーンズファンか？」

「何にし来たんだ？」

「何って俺達か？」

「私達が？」

ここでもお互いのことには気付いていない男連中と女連中であつた。それぞれ周りに来ているマリーンズサポーター達に対して返した。

「マリーンズファンって」

「阪神ファンですけれど」

「だったらもう少しマナーをよくしてくれないか？」

「一塁側に入れなかつたのはわかるけれどな」

彼等はとりあえずは紳士的に彼等に言った。確かに一塁側は満席である。阪神主催の試合ともなればその熱狂的な阪神ファンが集うから当然であつた。

「それでもな。ここはロッテの場所だからな」

「それは守ってくれよ」

「あつ、すいません」

「失礼しました」

彼等もマリーンズサポーター達の言葉にやや恐縮して応える。

「それじゃあここは」

「落ち着きますんで」

「ああ、そうしてくれ」

「巨人ファンなら命はなかつたぜ」

他の球団から憎まれ忌み嫌われているという点において巨人程素晴らしいチームは日本のスポーツ界には存在しない。それは何故か、巨人が日本のスポーツ界の超悪性病原体でありまさに癌であるからだ。言うならばあの愚劣な独裁国家北朝鮮のようなものである。

「応援してもいいけれどな」

「節度は守ってくれよ」

「すいません、それじゃあ」

「大人しくします」

彼等はこう言って仕方なく潜望鏡を収め静かになった。それでも今度は今度でメールをひっきりなしに打って連絡をしようとしていた。

「だからな。もうキスにいつていいからな」

「ここで何かあってもムードで許されるからな」

男連中はひっきりなしにメールを打つ。

「いけいけどんどんなんだよ」

「やってやれ」

女連中も見れば同じようにメールを打ちまくっていた。

「肩を寄せてね」

「コロンの香りを入れてあげるのよ」

こんなことまで指示を出すのであった。

「いい香りはそれだけで相手をノックダウンさせるから」

「いいわね」

こんな調子であった。とにかく応援そっちのけで彼等のことばかり考えていた。しかし当の彼等はメールのことも気付かず気楽に楽しんでいた。

第六章

「ああ、打った打った」

「やっぱり金本よね」

瞬も梓も試合を見ながら楽しく笑っていた。今丁度金本が打ったのだ。

そうしてランナーが帰っていた。阪神の先制点であった。

「よし、このままいけよ」

「新井がここでホームラン打ってくれば完璧よね」

「そうだよな。けれどなあ」

しかしここで瞬はぼやいた顔で同じ様にぼやいた声を出した。

「最近あいつなあ」

「調子悪いわよね」

「それが困るんだよ」

新井について話をするのだった。

「打ってくれたらいいけれどな」

「追加点だね」

そんなことを言いながらも試合は楽しんでいた。そうして最後まで試合を楽しみ球場を後にする。試合は結局引き分けに終わってしまった。

「やれやれ、まあ負けたよりはいいな」

「そうだよな」

マリーンズサポーター達もこんなことを言いながら引き揚げていく。中には球場のゴミをせっせと掃除している者までいる。

そしてその中を男連中も女連中も歩いていく。試合が終わったので二人も帰るであろうからそれを追いかけていつているのである。

「おい、見えるか？」

「ああ、あそこにいるな」

男連中がまた望遠鏡を出して見ている。二人をそれで確認したの

であった。

「今出ようとしてるぜ」

「そうか。じゃあ俺達もな」

「行くうぜ」

こう言い合いながら球場を後にする。それは女連中もだった。

「次何処だったかしら」

「確かシヨツピングよ」

梓に言ったそのデートコースの確認をしちえた。

「だから今度はね」

「商店街ね」

こんな話をしながら赤ら顔で球場を出るのだった。足は結構ふらふらしていたがそれでもそのまま球場を出た。そうしてまた二人をウオッチしていくのであった。

二人はそのデートコースを忠実に歩いていた。男連中も奇遇にも瞬に対して球場の後はそのすぐ側にある商店街に行くように行っていたのである。

「そうそう、そこな」

「その店に入ればいいんだよ」

丁度二人がアクセサリーシヨツプに入ったのを見て言うのであった。

「わかってんじゃないか」

「勉強してもらった介があつたわ」

こんなことを言いながら商店街の陰に隠れて見ていた。なおそれは商店街の人達から丸見えで皆それを見て眉を思いきり顰めさせていた。

「何やってんだこの兄ちゃん姉ちゃん達は」

「探偵ごっこか？いい歳して」

「ああ、少年探偵団だよこの人達」

また随分と古い話が出た。

「それなんだよ」

「じゃあ二十面相は何処なんだ？」

「四十面相だろ、御前そりゃ」

とにかく変なことをしているのであった。しかし相変わらず本人達に自覚はない。その自覚がないまま店の中も覗く。商店街の人達はそんな彼等を見てさらに言うのだった。

「そこに二十面相がいるみたいだな」

「千面相じゃないの？」

「あれはパーマンでしょ」

そんな話をしながら彼等の動向を見ていた。見ている筈が見られている。しかしやはり彼等はそれには気付かず様子を見続けている。その店の中は。

店の中はアクセサリーショップらしく洒落ていた。真っ白であちこちに人形やぬいぐるみが置いてあって綺麗なものだ。まるで不思議の国のアリスの世界だ。

「あつ、時計を持った兎」

「こつちにはランプの兵隊があるぜ」

梓と瞬はその店の中を見回しながら楽しそうに話をしていた。

「それに女王様と王様もいるし」

「あとこれがアリスだよな」

アリス達もいるのだった。ブロンドにブルーの瞳にひらひらとした服の女の子のぬいぐるみである。やはりここは不思議の国をイメージしたものだ。だった。

「これが」

「そうよね。完全にそれよね」

梓はそのアリスを見て言うのだった。

第七章

「このお店って」

「ああ。それにしても」

「どうしたの？」

「それ以外にも色々あるんだな、ここってな」

店の中を見回しての瞬の言葉である。

「ほら、これよ」

「ああ、これね」

梓は今度は瞬が指差したものを見た。見ればそれはブラウンの犬のぬいぐるみであった。梓はそのぬいぐるみを見てすぐに笑顔になった。

「可愛いじゃない、これって」

「あれっ、犬好きなのかよ」

「そうよ。大好きなのよ」

その笑顔で瞬に答えるのだった。

「家でも飼ってるしぬいぐるみもストラップも大好きよ」

「あっ、俺の家も犬いるぜ」

瞬もまた笑顔になっていた。

「柴犬だけねどな」

「柴犬って可愛いわよね」

「そうだよな。可愛いうえに賢いしな」

二人はそのまま犬の話題を続けていくのだった。

「やっぱり側に居てくれたら凄く有り難いよな」

「そうよね。やっぱり犬よ」

「猫もいいけれどな」

「まあね」

そんな話に興じて店の中で楽しくやっていた。その店の外では相変わらず二人の友人達がそれぞれ窓から覗き込んでいた。

「ムードいいな」

「ああ」

「最高の雰囲気だぜ」

男連中がまず話をしていった。

「何かあいつも思ったよりやるよな」

「っていつか素質あるか？」

「だよな。結構な」

自分達で勝手に納得していた。そうしてそれは女連中も同じであった。店の扉を挟んで男連中の隣にいるがそれでもお互い気付いてはいない。

「梓犬好きだからねえ」

「そうそう。それが功をなしてるってどうか」

「ムードできてんじゃない」

彼女達も彼女達で自分達の内輪で盛り上がっていた。

「このままいったらデートは成功かしら」

「初陣で武勲を挙げる」

「梓もやるじゃない」

こんなことをそれぞれ言いながら店の中を覗いている。ずっと周りには気付いていない。しかしここで彼等に声をかけてきた者がいた。

「あの」

「あの？」

「何ですか？」

「失礼ですがお店から離れてくれないでしょうか」

声をかけてきたのは白いブラウスに黒いズボンとチョッキ、それに蝶ネクタイという出で立ちの男であった。途方もなく大柄でありしかも服の上からも筋肉がありありと見える。顔はそのままハルクホーガンであった。少なくとも日本人の姿ではなかった。

「お客様の迷惑になりますので」

「ああ、気にしなくていいからよ」

「空気だと思つて」

彼等はそのハルク・ホーガンに対しても何でもないと口調であつた。

「別に店のもの買つわけでも入るわけでもないしよ」

「ただお店の中見ていただけですか」

「では。私の御言葉は聞いて頂けないのですね」

ホーガンはやたらに畏まった声で彼等に尋ねてきた。

「それに関しては」

「だから空気だから」

「石ころでもいいわよ」

「わかりました」

ホーガンは彼等の今度の言葉にまず軽く目を閉じてそれを会釈とした。

「それではです。……ムンツ！」

全身に力を込めた。するとその服が忽ちのうちに破れそこから鍛え抜かれた鋼の如き肉体が現われた。レスリングパンツは日の丸であつた。

「それではこちらへ」

「な、何だよこのおっさん！」

「ちよつと何処に行くのよ！」

「安心して下さい。リンチではありません」

その両手で男連中も女連中もまとめて抱え込んで連行して行くのであつた。

「これからプロレス場に行くだけです。商店街の」

「商店街に何でそんなもんがあるんだ？」

「どうなつてるのよ」

「御心配なく。プロレスの事務所です」

それだと言つのだ。ホーガンは。

第八章

「じゃあ俺達どうなるんだ？」

「プロレスっていうとまさか」

「はい、言葉で言っても聞かない人はこの商店街ではプロレス事務所に来てもらうことになっているのです。これがこの商店街のルールです」

こう彼等に説明する。

「ですからルールに従ってもらいます」

「げっ、偉いことになるぞこりゃ」

「やっぱりリンチじゃない」

「リンチではありません」

ホーガンの言葉ではそうであるのだ。

「さあ、ではこちらへ」

こうして彼等はプロレス事務所に連れて行かれる。そうしてそれと入れ替わりに瞬と梓が店から出て来た。彼等はその手にそれぞれぬいぐるみやストラップ、それにアクセサリーといったものを持っている。その顔は満面の笑顔でありにこにことしていた。

「いやあ、一杯買ったよな」

「そうよね」

梓はにこにことして瞬に答える。

「こんなにいいものが一杯あるなんて」

「犬のアクセサリーだけでも随分とな」

「本当にね」

見ればどのぬいぐるみやアクセサリーも犬のものだった。二人の大好きな犬のものばかりであった。その犬に囲まれてそのうえで笑顔でいた。

「またここに来たいわ」

「じゃあまたここに来るか」

「そうね」

二人は笑顔で話をしていた。

「今度のデートでもな」

「何時にしたらいいと思う？今度のデート」

「再来週にしないか？」

瞬は笑ってこう提案してきた。

「再来週。どうだよ、それで」

「そうね。再来週ね」

梓は瞬のその提案を聞いて微笑みを浮かべた。

「その時までにはアルバイトでお金を作っておいてね」

「そうだよ。じゃあ再来週な」

「わかったわ。じゃあその時は今回よりももっと楽しいデートを」

「しような」

「了解よ」

二人は笑顔を見合わせてそのうえで言い合っていたのであった。こうして二人だけの楽しいとても満足した時間を過ごしたのであった。

その翌日。二人はそれぞれ。身体のおちこちを痛そうにしている友人達と会うのだった。

「あれっ、御前等よ」

「どうしたのよ」

二人はそれぞれのクラスで彼等に対して尋ねた。その様子が如何にもおかしかつたからである。

「何か軽い交通事故でもあったのかよ」

「誰かに襲われたとかじゃないの？」

「交通事故より酷い目に逢ったよ」

「襲われたっていか地獄を見たわね」

彼等は憮然とした顔でそれぞれの場所で二人の問いに答えた。

「全くよ。プロレスラーが何であんな場所にいるんだよ」

「日本人じゃないでしょ、あのハルク・ホーガン」

「プロレスラー！？」

「ハルク!! ホーガン!?!」

しかし二人はそれを聞いても何が何だか全くわからなかった。それでついつい首を傾げてしまう。どうしてもわからなかったのだ。

「何だよ、それって」

「ホーガンさんに会ったの?」

「何でもねえよ」

「会ってはいないわ」

彼等はここでも憚然として二人に答える。

「そういう人にはな」

「えらい目には逢ったけれど」

「話全然わからねえけれどよ」

「えらい目!?!」

やはり二人は首を傾げるばかりであった。

第九章

「何なんだよ、一体」

「何かあったのは間違いないわよね」
「とりあえずそれはわかるのだった。」

「昨日そっちは大変だったみたいだな」

「よくわからないけれど」

「聞くな」

「何でもないから」

彼等は自分達のことについてはこれ以上語るうとしなかった。口を貝殻のようにさせてそのうえで忌々しげな顔をしているだけであつた。

「それはそうとよ」

「あんた達は上手くいったみたいね」

「ああ、俺達のことかよ」

「そうよ」

二人はそれぞれのクラスでそれぞれにこりと笑つてみせた。

「大成功だったぜ」

「デートつてあんなに楽しいものなのね」

まさに大雨が降る直前の曇り空の友人達に対して二人の笑顔はまさに雲一つない快晴であつた。太陽が燦々と照つてさえいる。

「また今度も行くからな」

「もう今から楽しみだわ」

そしてその笑顔で友人達に語るのであつた。

「早速計画してるんだよ」

「あのアクセサリーショップは外せないとして今度は何処行こうかしら」

パーティーナーはその場にいないのにそれでもおのろけに入っていた。

「なあ。何処がいいと思う？」

「よかつたらアドバイスして」

「知るか」

「勝手にやったら？」

その二人に対する友人達の返答はこんなものであった。

「自分でな。勝手に決める」

「二人だけで楽しんだらいいじゃない」

「あれっ、前と言ってること違うじゃねえかよ」

「どうしたの？おとついまでと言ってること違うわよ」

二人はそんな彼等の言葉にきよとんとした顔になって言い返した。

「あんなに色々言ったのによ」

「どうしたのよ。急に」

「何でもねえよ」

「気にしないでいいから」

彼等はここでも慥然とした顔で返すだけであった。

「別にな」

「あなたには関係のないことだし」

「！？何かわからねえけれどよ」

「じゃあそれでいいわ」

二人も何が何なのかわからないままその言葉を受けた。

「じゃあ次のデートの計画はこっちでな」

「考えておくわね」

「わかつたさ。つたくよお」

「こつというのは何も言わないのが一番なのね」

能天気なまでにはしゃいでいる二人とは全くの正反対で彼等は慥然としていた。何はともあれ二人のファーストデートは最高の形で終わりそのまま楽しい恋路を二人並んで歩きはじめていた。周りは余計な災難というか自業自得の結果となってしまうたが。

ファーストデート 完

2009・6・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8789h/>

ファーストデート

2010年10月8日15時29分発行